

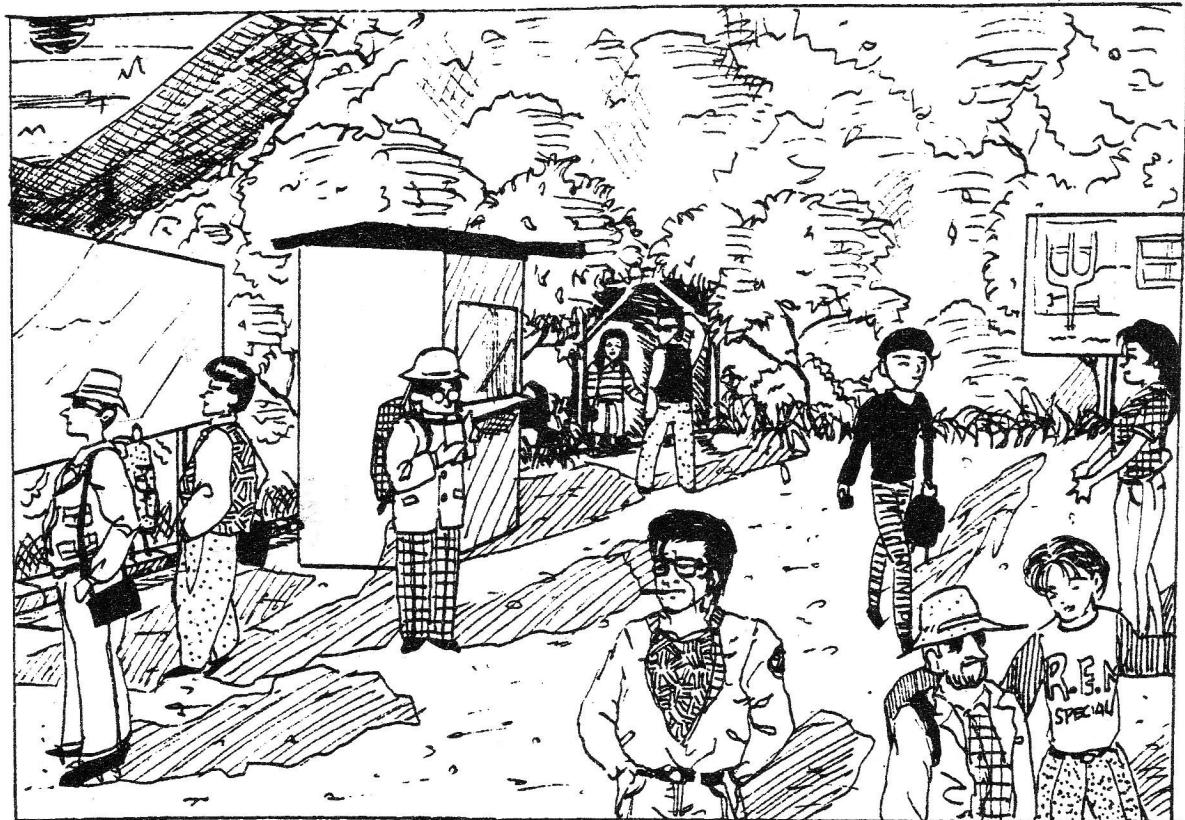
日吉台地下壕保存の会

会報

第31号

発行 日吉台地下壕保存の会
編集 事務局

223 横浜市港北区下田町3-15-27
寺田方 TEL.045-562-1282
(年会費) 一口千円で、一口以上
郵便振込 (口座番号) 横浜 5-74921
(加入者名) 日吉台地下壕保存の会



旧松代大本營地下壕入口の風景

昨夏、岡上、足立さんが見学してきました 岡上そう画

目 次

ペー ジ

昭和は遠くを読んで	2	連載日吉台地下壕
旧陸軍の登戸研究所		当時の関係者の
取り壊しを3年間凍結	3	思い出話 7
日吉台地下壕見学会感想文	4~5	幹事会報告
		お知らせ
		6~7
		8
		8

松浦 喜一著

は速く生き残った特攻隊員の遺書を読んで

幹事 中沢 正子

昭和は遠く

牛馬のた牧場の事

松而喜

召南二雅

母基地を出発した三機の特攻機は高度二〇mという超低空飛行で沖縄をめざした。あと

一〇分か二〇分で敵艦船へ突入という時に一機が墜落していく。その後、何故か、和泉編隊長機は北をめざし、生還へのコースをたどる。「どうしたのだ？ 何故だ？」と

づけ、生還した松浦特攻隊員の五〇年にわたる自問自答の記録である。

壕を出て、直接我々を陣頭指

揮、特攻出撃の行を共になさ

どうして日本が救われるか。
今、目覚めずして、いつ救わ
れるか。俺達は、その先導に

なるのだと日本の新生にさき

かけて散る。まさに本望じや
ないか」

戦時下にこれ程のこと下さい

切つて戦死していつた人がい

たことに、深い感銘を受けた

松浦氏の自らの疑問を解き

明かそうとする自問自答の文

脈の中に、追体験し一緒にな

で考え方とする自分をみ

うと吉田満著「戦艦大和」

(角川文庫) 「鎮魂戦艦大和」

上・下（講談社文庫）を読み終えました。この収穫が、この

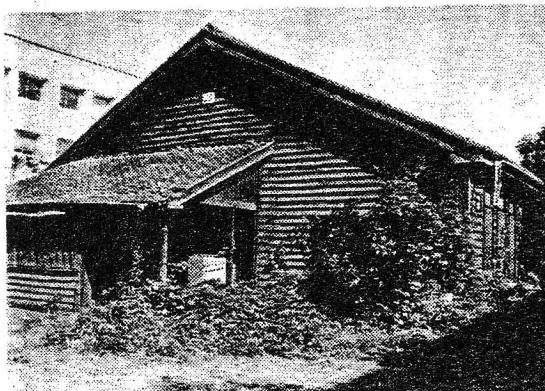
つた。これからもいろいろな

記録を読み進み、先人の意志

を無にしないよう努力しなけ
らば、此の二つは別の事。

れはならぬと思ふ

旧陸軍登戸研究所の建物保存についての統報と、同研究所の元研究員の自分史の記事をお届けします。



取り壊しが凍結された旧登戸研究所の研究棟

第二次大戦中の日本最大の秘密研究機関で、現在の明治大学生田キャンパス(川崎市多摩区東三田)にあった旧陸軍登戸研究所のうち、大学側が取り壊す予定だった現存研究棟の一つ、農学部二十六号棟が、九七年度末まで取り壊しが凍結されること、一日分かった。先月十四日、教職員組合との交渉の席で、大学側が明らかにした。研究棟の保存を主張する同大人文学系研究所の教職員らが、来年度から三年間、登戸研究所について調査・研究するのに伴う措置。大学側は将来的には「取り壊しの方針を依然、崩していかないものの、教職員は「これを機会に本格的な保存運動にはすみをつけたい」と話している。

今回、三年間の保存が決

つ。当時、動物への細菌実

験を行っていたが、研究内

容は明らかにされていな

い。今年初め、大学側は防

災面や教室不足を理由に数

力用以内の取り壊しを表明

したが、教職員のが反対し

たことなどから、一時的に

取り壊しが棚上げにされて

いた。

大学側は、三年間の取り

壊し凍結について「研究

棟は歴史的建造物なので

できる限り調査に協力し

たい。しかし、永久保存

は、予算面など一大学と

しては手に余る」と説明

する。

一方、同研究所の調査に

加わる森恒夫・経営学部教

授は「保存運動の効果が早

くも出で、うれしい。調査

会報第二九号に掲載した明治生田キャンパス内の
旧陸軍登戸研究所の建物保存についての統報と、

「調査に協力」と明大

教職員「保存にはずみ」と歓迎

を通じて登戸研究所の歴史的意義をより明らかにする
とともに、本格的な保存方
法を考えたい」と話

している。

登戸研究所は、スペイ活
動などの謀略戦のために作
られた研究機関。風船爆弾
や中国のニセ札などを製造
し、実際に使つたり、毒ガ
ス、細菌兵器やレーザー光
線などの研究も行った。ま
た、中国での人体実験など

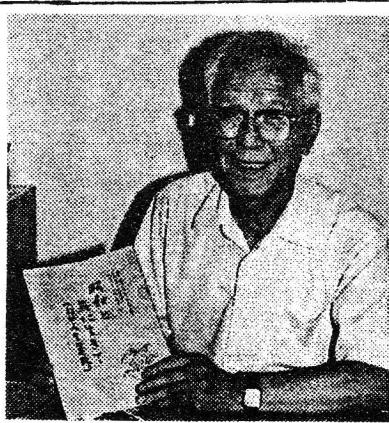
で有名な「3一部隊ともか
かわっていた」ともいわれ
る。戦後、研究施設は同大
に払い下がられ、多くが校
舎として使われてきたが、
近年、老朽化がひどいと
が取り壊された。

毎日新聞

九四・一一・二

毎日新聞 九四・八・一

戦争がいかに無益なものを若者たちに知
つてもらおうと、細菌兵器や風船爆弾の研究
で知られる旧陸軍の秘密研究機関「登戸研究
所」(川崎市多摩区東三田)の所員だった和
田一夫さん(七二)川崎市麻生区細山)が、自
分史「昭和と共に生きて—わが人生の足跡」
を自費出版した。研究所でのエピソードやシ
ベリア抑留、中国の戦犯管理所での生活、帰
国後日中友好運動に奔走する日々が百五十
年にわたってつづかれている。



自分史「昭和と共に生きて」を手にする和田さん

日立ロムロ地下壕

日元学子ム云感想心文

一九九四年七月二十四日

国立市公民館受講者

★昭和二〇年八月九日フイリピンで戦死致しました父の事とダブリ、この地下壕からの指令が父達の所にどのように伝わったのか、父達はどのように気持で死んで行ったのか、つらい思いが致します。

発電、飲料水等工夫されてい
るのには驚きました。

★沢山の方々に助けていただき、やっとのことで泥水の中を歩きました。けれど、工事にたずさわった人々の苦労を思えば……

松代、登戸、百穴、日吉とめぐり来て、思い半ばに過ぎるものありという感じですが、八〇才に近い我身の残りの時間に今日の経験をどのように活かすか、重い使命を感じま

す。

★今までには加害者としての日本というのをかなり強調し、自分も意識して戦争記念日を過ごしていたが、今回は敗戦した日本、被害者としての日本を特に感じた。四年間もアメリカの統治下にあつた日吉台地下壕のことや、入口の爆破のことを聞くと、日本の敗戦のみじめさが分かり、同時に開戦の段階で50%の勝率と自算していた指導部が、それでも戦宣言をしたことに日本車のころかさを感じる。

★小学生が退屈していやがるかと思ったが、大変興味をもつて親子で参加できてよかったです。終戦記念日が近づくにあたり、今日の体験をいかし内容のある話を親子ですることができると思う。

地下壕内で鍾乳洞でみられる貴重な岩石や菌類がみられた

のも大変うれしく思った。

★負けると分つていて、こんな立派な物を造り、その為にどれだけの人が苦しんだことか。朝鮮の人も今だに、差別を受けている現状を考えると、戦後は終つていいと言わっているのは本当だと思います。

戦後は終つていい事です。私達戦前生れが語りつぐ義務があると思います。二度と戦争が起ららない為にも!

★思つていて以上に壁がかたく、しつかりしていて驚いた。

戦時の一年間にあれほど穴をいくつも造るにはどれだけの人手を費やしたことか。そのエネルギーが違う方向に向いていれば、松代などの駄な物が出来ずに済んだのではないかだろうか。生で見てシヨツクを受けました。

★この壕が唯一の海軍の司令部とは思えないほど貧弱なも

の。改めて最高責任者の無能ぶりに憤りを覚える。登戸の方が日本の特殊部隊の実態を残しているような気がする。

★戦時中はあんなに暗くジメした所で仕事をしていった人もいたと思うと、やっぱり過酷なものだったのだと思う。

初めは面白半分だったが、すごく勉強になつたし、来て良かった。

★地上で生活しているだけで爆弾が落ちてくる世界なんて異常だ。あのような息のつまる場所で生活する必要があるのか。あるとすれば穴にもぐれる人々はいいが穴にもぐれない一般人はどうするのだろう。「誰の為に戦争をするのか?」という疑問が頭から離れなかつた。

★今まで知らなかつた現実を知らされた。隠されていると

り沢山あるということを知りました。

戦争中に使われた地下壕に入れたなんて信じられないです。私も含めて今の人々は、昔のこと（戦争のことなど）をすぐ忘れがちであるから、こういふた見学会を開いてくださると非常に嬉しいです。

★詳しい説明があつたので理解の補助となり大変良かった。しかし、もう少し内部を時間をかけて見学したかったというのがホンネです。寺田先生がほとんど毎回のように説明をされているということで、先生がお忙しいのが原因かと思します。

存在を知らせること、戦争や平和について考えるきっかけづくりとして見学会は有意義なことだと思います。今後は見学会に加えて解説をする人の育成も行なつて欲しいと思い

ます。

★保存会で作った本がありますが、一般書店では購入できないとのこと。会員でお金を出してでも、書店に置くようにして欲しいです。そういう活動が他の人々や行政を動かしていくのだと思います。

保存についてどうお考えになりますか

★観光化せず、にもかかわらず、広く一般の方々に知つてもらうということは、大変難しいことだと思います。入口が個人宅にあること等他の難点も多いとは思いますが、次世代に伝承する意味で保存は大切な課題になっていくことと存じます。壕内の整備が不可欠でしょうか。

★戦争や平和の問題を考え上で、有形文化財としての貴

★保存会で作った本がありますが、一般書店では購入できませんが、保存、公開は必須だと思います。ただ、公の機関での公開になると、公開の仕方も問題が出てくるかと思います。保存されるようになります。保存されるようになつても戦争賛美的にされないように、市民が運動していく必要があるでしょう。

★松代にしても、日吉にしても、保存して、歴史遺産は歴史教育に役立てる唯一の物で、百聞は一見にしかずです。保存活用は私達戦前生の務めではないかと思います。

★この地下壕を保存するどもに、このことを多くの人々（特に若者、慶應高校、大学の学生など）に知つてもらえるよう、頑張つてください。

★単なる記念物としての存在

重な資料だと思う。後世に伝える為にも保存、見学等積極的に行なつていくべきだ。

★保存会ののような地道な市民の活動により、正しい歴史の真実が明らかになることを期待します。保存会が国に何らかの影響を与えられたらいいと思います。保存会が国に何らかの影響を与えられたらいいと思います。

★戦争の無残さ、空しさ、無謀さをのちの世の人たちに伝える為に、ぜひ保存運動をと思います。携わつた人々の涙と汗と血を無駄にしないためにも。

★大学の地下という半公共の場にあるのですから、公の力でもつて今の状態をこれ以上壊さないように管理できればいいと思います。

連載

日吉ロムロ地下壕

当時の関係者名の
心い出山話 8

地下壕の築城 3

地元の方と、日吉に移転してきて築城をかいきました軍関係者の方に伺います。

さきさて・寺田貞治

★Y氏・日吉

戦争中、土建業をしていたので、車から頼まれて地下壕を掘る人夫を三〇人ほど世話をした。いい手間賃になると、いい世話をした。夜は人夫の寝泊りなど、人夫が働いている現場には行つたことはないが、現慶友病院の方から慶應の校舎の方に掘つて

いたと聞いた。

★A1氏・宮前

地下壕建設の作業は、一五六才の少年兵や朝鮮人がやつていた。父の話だと朝鮮人が殆どだったという。主にツルハシで掘り、土はトロツイナマイトを使っており、時々ハッパの音がした。現在住

んでいる家は、運び出した土の上に建てられており、以前より四、五田高くなっている。

兵隊や土方や朝鮮人が、お腹を空かして来るので、よく

大豆を炒つてあげた。見つかると車から怒られた。近所の農家では兵隊さんの親子を内密に会わせたりしていた。

★K1氏・箕輪

地下壕を掘り始めたのは昭和一九年の中頃であった。掘つていた兵隊は、北海道から来た人が多かつた。桃や葡萄など果物を作つていたので、兵隊がよく果物をもらいに來た。朝鮮人は見かけなかつた。

し、噂に聞いたこともない。掘り出した土は壕の出入口の下の低地（慶大寄宿舎の北側の低地）に捨てていた。

★K2氏・箕輪

地下壕は現在の小島宅の裏に出入口が三つある。rの出入口のところにカマボコ兵舎があり、兵士が寝泊りしている。地下壕の北側二本は出入

口から西に向つて急な坂になつていて途中から平になると、すべての地下壕は西の方に少し下がつており、掘つた土砂は西側に運ばれた。小島宅裏から地下壕に入り西の出入口から出るとちょうど

